

# 語彙習得学習における語種間共通方略モデルの開発とその実践 ——辞書引き学習の動機づけと方略の有効性をめぐって——

深谷 圭助\* 吉川 龍生\*\*

## Development and Practice of Interlanguage Common Strategy Model in Vocabulary Acquisition Learning: —The Motivation and Effectiveness of the Strategy of “Jishobiki” —

FUKAYA Keisuke YOSHIKAWA Tatsuo

### 要 約

本研究の目的は、自己調整学習理論に基づいた語彙学習における言語間共通方略モデルを日本とイギリスの学校教育に導入することを通して、学習者の語彙学習に対する学習態度を主体的にすることができるかどうかを実証的に明らかにすることである。また、このモデルを日本の大学の外国語（中国語）学習に導入することにより、学習態度を主体的にすることができるかを実証的に明らかにすることである。

具体的には、イギリスの英語教育、日本の国語教育、日本における中国語教育へ、言語間共通方略モデルである“Jishobiki”を導入することを通して、モデルの学習者へもたらす効果を検証する。なお、イギリスと日本で、この語彙学習モデルを体験した児童へのインタビュー逐語記録を元に、主体性概念構造を明らかにし、比較・分析する。

言語学習担当者が、学習者の語彙力向上と継続的な学習習慣の形成を促進する言語間共通方略モデル“Jishobiki”の導入をした場合、一般的に人々から単調で忍耐を求められる学習と捉えられている語彙学習をどのように変えることができるのか、どのような効果が得られるのかについて、イギリスの小学校の英語学習、日本の小学校の日本語学習、日本の大学における中国語学習の場面において実証的に検討することである。

### 1. 研究目的

本研究の目的は、自己調整学習理論に基づいた語彙学習における語種間共通方略モデルを日本とイギリスの学校教育に導入することにより、学習者の語彙学習に対する学習態度を主体的にすることができるかを実証的に明らかにすることである。また、同モデルを日本の大学の外国語（中国語）学習に導入することにより、学習態度を主体的にすることができるかを実証的に明らかにすることである。

具体的には、イギリスの英語教育、日本の国語教育、日本における中国語教育へ、語種間共通方略モデルである「辞書引き学習（英語圏では“Jishobiki”と表記）」を導入することを通して、モデルの学習者へもたらす効果を検証するとともに、その限界についても明らかにする。なお、イギリスと日本で、この語彙学習モデルを体験した児童へのインタビュー逐語記録を元に、主体性概念構造を明らかにし、比較・分析する。

言語学習担当者が、学習者の語彙力向上と継続的な学習習慣の形成を促進する語種間共通方略モデル“Jishobiki”の導入をした場合、一般的に、人々から単調で忍耐を求められる学習と捉えられている語

\* 中部大学現代教育学部現代教育学科

\*\* 慶應義塾大学経済学部

彙学習指導をどのように変貌させ得るのか、如何なる効果が得られるのかについて、イギリスの小学校の英語学習、日本の小学校の国語学習、日本の大学における中国語学習の場において実証的に検討することである。

## 2. 問題の所在

### (1) 「主体性」形成のための「自己調整学習」の必要性

「主体性」という言葉は、日本の新しい学習指導要領のキーワードである「主体的、対話的で深い学び」にも登場する、鍵概念である。この「主体性」という言葉を英語で翻訳してみると、Self-Regulated、Self-Directed、Independent等、様々な訳語にあたる。

教育心理学領域では、1980年代に、Zimmermanが“Self-Regulated Learning”（自己調整学習）を、Knowlesらが“Self-Directed Learning”（自己主導型学習）に関する研究を開始した。Zimmermanらの研究では、“Self-Regulated Learning”（自己調整学習）における主体性を涵養する教科指導では、以下の2点を意識した指導が重要であるとされている。

- ①学習の動機づけ：なぜ学習をするのか
- ②学習方略：どのように学習をしたら効果的に学習できるか

本研究では、この自己調整学習の理論を背景とした国際共通語彙学習モデル「辞書引き学習“Jishobiki”」を語彙学習に導入することにより、学習者の語彙学習における主体性を向上させたい。

### (2) 言語学習の「動機づけ」の重要性と「自己調整学習」

さて、近年、グローバル化に伴って、国や言語、文化を超えてコミュニケーションが行われるようになり、学校教育における言語学習の在り方が見直されている。国や地域によっては、子供たちは親の話す言語である母語だけではなく、国が制定した公用語、あるいは習得することが望ましいと考えられている外国語学習、また、国民性を涵養する言語である国語を学ばねばならない。

言語を学ぶ、「動機づけ」は重要である。例えば、第1言語、第2言語、第3言語をそれぞれ学ぶことは動機づけが異なると考えられる。例えば、国語を学ぶことは、日本の場合、日本語があまりにも当然のように用いられているが故に、学習の対象としての動機づけが弱く、学習方略も意識されないことが多い。一方で、外国語を学ぶことは、あまりにも非日常的な言語であるが故に、学習の動機づけは難しい。

外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment）は、現代の各国における言語学習に多大な影響を与えているが、この語学シラバスやカリキュラムの手引き、学習指導教材の編集、外国語運用能力評価の考え方には、言語学習における学習者の意欲化の問題、動機づけの問題は反映されていない。この枠組みは、あくまでも複言語がヨーロッパ標準とする考え方を表したものである。

言語能力の熟達は、長期間にわたる地道な学習が必要であり、特に、語彙学習は単調になりがちになる。それゆえに、欧州以外の国々がCEFRの枠組みに従って言語教育を行う場合、言語教育の動機づけの問題は困難な問題である。この困難と目される、語彙学習における動機づけと学習方略を、Zimmermanらの自己調整学習モデルに対応した辞書引き学習“Jishobiki”を導入することにより、先述の諸問題を解消できる可能性を実証的に明らかにしたい。

## 3. 語彙学習モデル「辞書引き学習（Jishobiki）」とは何か

ここで、語彙学習モデル“Jishobiki”について説明する。「辞書引き学習」は、深谷圭助が日本の小学校において、1990年代に開発した辞書を教材とした学習法である<sup>1)</sup>。「辞書引き学習」は、自己調整学習モデルの2つの構成要素「動機づけ」と「学習方略」によって構成されている。辞書引き学習により、自己調整力を育てることで、有能な語彙学習者として自立させることができる。シンガポールやイギリスでは、このモデルを“Jishobiki”と呼び、

以下のように紹介されている<sup>2)</sup>。

*“Jishobiki is one of the effective learning approaches of literacy education, especially in promoting reading and writing skills as well as prompting academic competence and literacy in school.”*

深谷は、同語彙学習モデルの開発を1994年から着手し、1998年に論文と著書で同学習モデルに関する研究成果を公表している<sup>3)</sup>。また、拙著『7歳から辞書を引いて頭をきたえる』（すばる舎、2007年）以降、関連書籍が刊行されている<sup>4)</sup>。

同語彙学習モデルが、学校や家庭で受容された背景の一つとして、辞書の「引き方」を教えることが、必ずしも、子供の語彙への理解を深め、広く語彙を獲得することにつながっていなかったことがあげられる。これまでの辞書指導が、「引き方」指導に偏しているという問題は、日本だけの問題ではなく、イギリスを始めとした諸外国においても同様である。語彙学習は、継続的に単調な作業（読み書き）を行わなければならない、語彙学習を、辞書を活用させることによって活動的に展開することは、子供の語彙の理解や語彙の拡張に効果的である。Knowles、渡邊（2005）によれば、「辞書の引き方」を教えるという、教師主導学習では、「引き方」を学習リソースとしてみた場合に、「引き方」に関する教師・教科書の執筆者、教材の製作者の有する経験の方が、学習者自身の経験よりも優れたリソースであると捉えられ、それゆえに教師は、これらの専門化のリソースを学習者に伝授する責任を持つものだと考えられている。その一方で、自己主導型学習では、学習者の経験は専門家のリソースとともに活かされるべき非常に豊かなリソースとしてみなされるという<sup>5)</sup>。「辞書引き学習」は、「引き方」指導から、辞書を学習者が活用することで広がる語彙学習の可能性を引き出すことで、教師と学習者が豊かなリソースを生み出すことを目指したものである。

本研究では、語彙学習モデルである辞書引き学習“Jishobiki”を、日本とイギリスの小学校で一定期間実施し、同学習モデルが、国民語における語彙学習の動機づけと学習方略の両面から、主体性（自己

調整力）を身につけることに成果をもたらしているかどうかを、実施後の児童へのインタビュー逐語記録を分析することで検討する。また、日本における中国語学習における語彙学習モデルJishobikiの導入とその効果についても検討する。

#### 4. 国際共通語彙学習モデル“Jishobiki”の日・英小学校への導入事例

##### (1) 国際共通語彙学習モデル“Jishobiki”の日・英小学校実証研究の概要

イギリス・WorcestershireのC小学校では2017年3月15日から現在までJishobikiに継続してYear3とYear4の児童が1週間に1時間同一教室でこの取り組みに参加している。

本研究では、研究実践の効果検証のため、イギリスのWorcestershireにあるC小学校においてJishobikiに2年間取り組んだYear5の児童3名に対するインタビューを2019年3月7日に実施した。

また、日本・島根県のH小学校では2012年から現在まで継続してJishobikiに取り組んでいる。Jishobikiの実践研究では、小学校1年生から6年生が全員同じ教室に集まり、1週間あたり1授業時間、辞書引き学習に参加している。

本研究では、研究実践の効果検証のため、H小学校で“Jishobiki”に6年間取り組んだYear6（6年生）児童3名に対するインタビューを2019年3月22日に実施した。

本章では、イギリスと日本の児童に対するインタビュー逐語記録を分析する。分析に際しては、

- ・子供たちに対する『動機づけ』はどのように行われ、学習効果をあげているか
- ・子供たちの『学習方略』は、どれだけ定着し、学習効果をあげているか

以上の2つの観点から分析を試みる。

本研究では、主体性や自己調整力が向上するという事実が確認できれば、通常、地道な努力を必要とする語彙学習がActive Learningとなり、主体的な学習態度が形成されたとみなす。

## (2) イギリス・ウスターシャーC小学校における語彙学習モデル「辞書引き学習 (Jishobiki)」の導入と児童へのインタビュー逐語記録の分析と考察

イギリスのC小学校では、1週間に1授業時間、Jishobikiに取り組む時間が設定されている。対象とされる学年は、Year3とYear4の2学年である。イギリスのC小学校は小規模校であり、Jishobikiの指導については、Year3とYear4の2学年が同じ教室で学習を行っている。辞書引き学習をYear3とYear4で実施する理由としては、以下の2点である。

- ・ KeyStage2に入るYear5からはカリキュラムが過密であり、1週間に1時間のJishobikiの時間を捻出することが困難であること
- ・ Jishobikiという、語彙力向上のために動的に辞書を活用させる取り組みの特性として、Year3とYear4は適している年代であること。

イギリス・ウスターシャーのC小学校における語彙学習モデルJishobikiの導入による効果に関するインタビュー総時間は19分10秒である。

まず、イギリス人児童の辞書引き学習の取り組みに関するインタビュー逐語記録から、「動機づけ」と「学習方略」の観点で、以下の頻出語彙に注目する。(表1参照)

表1 Jishobikiの小学校英語教育への導入に係るイギリス児童の全コメント中の頻出語一覧

|                                         |                    |                                     |                       |                 |                |
|-----------------------------------------|--------------------|-------------------------------------|-----------------------|-----------------|----------------|
| ①<br>because<br>56                      | ②<br>word<br>50    | ③<br>help<br>44                     | ⑤<br>dictionary<br>32 | ⑥<br>fun<br>17  | ⑦<br>good<br>9 |
| ⑧<br>Independent<br>(Independence)<br>8 | ⑨<br>post-its<br>8 | ⑩<br>spell 28<br>spelling test<br>5 | ⑪<br>internet<br>2    | ⑫<br>silly<br>2 |                |

表1から“fun”が17回、“good”が9回、イギリス児童の逐語記録に出現していることが分かる。この結果は、辞書引き学習法が児童の満足感につながっていることを示唆するものである。この2語は、語彙学習に対する「動機づけ」に該当する語彙とみなすことができる。“fun”や“good”の登場する

場面は、Jishobikiに関する評価のコメントであり、学習効果が見込まれることによる「期待感」につながるコメントである。イギリス人児童は、忍耐と継続を求められる語彙習得において、彼らなりに学習を楽しみとするための努力が行われていることが推察される。funやgoodの根拠として、以下の「動機づけ」により学習活動が継続して展開されている。

- ・ 辞書につける付箋がカラフルなので、付箋に書いた言葉が目につき、忘れにくいから。
- ・ 机や椅子を要しないJishobikiを屋外で仲間と行うことができるから。
- ・ 新しい言葉を用いて、意外性のある面白い文章を作ることができるから
- ・ スペリングテストへの対応、スペリングを正確に習得することができるから。
- ・ 真っ当な英語の使い手になることができるから。
- ・ 学習者として自立できるから。

また、イギリス人児童が、“fun”であることの根拠を、“because”の後で明示していることから、イギリス人児童が、自己の学びを俯瞰していることが分かる。実際、イギリスの児童のコメントには、因果関係を示す“because”が56箇所、頻出してている。

イギリスの児童の言語教育において、1980年代のイギリスカリキュラム改革以降、論理的思考をするための論理的な話し方が重視されており、因果関係を明確にする教育が行われてきた成果なのだろう。このようなイギリス小学校教育の経緯と背景があると思われるが、この調査で“because”がイギリス人児童のJishobikiに関するコメントで頻出したことの理由は、以下のように考えることができる。

児童が、Jishobikiを継続して実践することにより、「学習方略」が、児童によって習得され、語彙学習の成果を実感することで、将来の学習成果への期待が高まり、「動機づけ」が更に強化されることの現れが、“because”に続く文章に示しているのではないか。

先述した、“fun”が17回にわたり頻出したことのみならず、辞書引き学習を評価する語としての

“good” が9箇所であり、自己調整学習における「動機づけ」と「学習方略」の定着がもたらす動機づけの強化が上手く機能していることが窺える。更に、“post-its”が8回にわたって頻出しており、“post-its”を辞書に貼り付けるという「学習方略」は、「自己調整学力」における「動機づけ」として機能していることが分かる。

また、“independent、independence” が8回にわたって逐語記録に登場していることも、自己調整学習としての辞書引き学習が機能していることを示している。児童それぞれが自立的に学習の当事者として語彙学習が展開されている。

イギリス人児童らは、自己の言語的能力の成長に関する関心が高く、“word” が50箇所にわたって使われている。また、「辞書引き学習」が様々な能力に働きかけたことを示す“help” が44箇所用いられている。

イギリス人児童が“spell” を25回、“spelling test” を5回、逐語記録の中で用いている。イギリス人児童が英語を学ぶ上で、“spell” が大きな課題であることが考えられる。語彙学習における spelling, や spelling test がイギリス人児童にとって大きな負担になっていたことは容易に想像できる。英語教育の内容の中核的な内容である語彙学習と語彙学習における効果的な学習方略の習得は児童にとって大きな関心事であり、辞書引き学習による学習方略の習得も児童にとって期待は大きい。それゆえに、児童の語彙習得に有効な学習方略に対する理解と「学習方略」の運用が、「動機づけ」と連動して児童コメントの中に表れているのは興味深い。イギリス人児童にとっての“spelling”、日本人児童にとっての“漢字習得”はそれぞれの小学校語彙指導の中で中核的であり、その習得のために、児童には忍耐と継続的な取り組みが求められる。忍耐と継続性という2つの学習負担の軽減を、自己調整学習方略としての辞書引き学習によって児童が取り組み、成果を得ている点は評価できる。

### (3) 日本・島根県H小学校における語彙学習モデル「辞書引き学習」の導入の概要と児童へのインタビュー逐語記録の分析と考察

#### ① 日本・島根県H小学校における語彙学習モデル「辞書引き学習」の導入の概要

日本の島根県のH小学校では、小学校1年生で辞書引き学習の導入が行われ、小学校1年生から6年生まで、1週間に1時間、辞書引き学習に取り組む学習機会が保証されている。イギリスのC小学校も、1週間に1時間、辞書引き学習に取り組む時間が設定されているが、対象とされる学年は、Year3とYear4の2学年である。

日本のH小学校とイギリスのC小学校はいずれも小規模校であり、辞書引き学習の時間は、日本のH小学校では1年生から6年生までの6学年が全員で同じ教室で学習が行われている。イギリスのC小学校ではYear3とYear4の2学年が同じ教室で学習を行っている。

#### ② 島根県H小学校児童へのインタビュー逐語記録の分析と考察

日本・島根県H小学校における語彙学習モデル「辞書引き学習（Jishobiki）」の導入による効果に関するインタビュー総時間は16分50秒である。

日本人児童に対するインタビューの逐語記録から頻出語を抽出してみると、イギリス人児童に比べて、自己の学びを俯瞰することを示す頻出語が少なかった。学習上の自立を表すindependence（自立）という語は、イギリス人児童からは出てきたが、日本人児童からは出てこなかった。自分の語彙力向上が、どのように辞書引き学習によって促進されたかについて、日本人児童によるインタビューよりもイギリス人児童の方が明確である。これは、イギリスの英語教育に比べ、日本における国語（日本語）教育では、語彙獲得に対して関心が払われてこなかったことを表している。

日本の児童の逐語記録には“fun”に該当する語はない。6年生の日本人児童は、「楽しい」「好き」という感情的な言葉を使うことに抵抗があるのだろうか。楽しい、好きであることを理由に、Jishobikiによる学習効果について語る様子は見られない。「言葉」を「調べる」、「勉強する」ことの向こう側に、「自分」にとって「辞書」が「役に立つ」という理由づ

けを行っている。つまり、学習は義務であり権利であるが、楽しいという概念とは必ずしも学習と結び付いていないということなのだろう。調査をした児童がYear6（小学校6年生）であったということにも関わるのかもしれない。

イギリス人児童は、スペリングテストに対する負担感は大きく、辞書引き学習をスペリングテストに対応した学習法として認知しているようである。日本人児童の漢字学習に対する負担感も大きいことが予測されるが、日本の漢字学習がドリル学習を中心に進められ、学習の範囲が学年ごとに限定されているが故に辞書で漢字を学ぶという使い方はしないということであろう。

また、becauseに該当する「なぜなら」は6回頻出しているが、すべて、将来希望する職業と辞書引き学習の関係を説明する際にのみ使用されている語となっている。将来という言葉に対して、日本人児童は、「将来、希望する職業」と「将来」という言葉を「職業」という言葉を同義としてみなす傾向が強かった。イギリス人児童は、将来を「中学校」という意味として捉え、比較的近い未来のイメージとして捉えているが。それに対して、日本人児童は、成人後の職業としてイメージしている。このことは、日本の児童にとって、関心のある分野の内容を学ぶことが、将来の職業に直結していると考えたことに起因しているのだろう。H学校では、Jishonikiを学ぶ際に、自分の好きなことや興味のあること調べて、発表する学習の流れを設定していた。このことに影響されたものであろう。

表2 Jishobikiの小学校国語教育への導入に係る日本人児童の全コメント中の頻出語一覧

|                     |                  |                |                  |              |
|---------------------|------------------|----------------|------------------|--------------|
| ①<br>言葉<br>29       | ②<br>調べ(る)<br>10 | ③<br>自分<br>8   | ④<br>勉強(する)<br>5 | ⑤<br>辞書<br>4 |
| ⑥役立つ<br>(役に立つ)<br>3 | ⑦<br>おもしろい<br>1  | ⑧<br>なぜなら<br>6 |                  |              |

## 5. 日本の大学における中国語教育への語彙学習モデル「辞書引き学習 (Jishobiki)」導入事例

### (1) 理論的背景

日英両国の小学校における実践報告、とりわけ児童へのインタビューから、「辞書引き学習」が主体的な学習に好影響を与える要因として、次の2点が考察された。第1の要因は、学習者の達成感や自己肯定感を高めているという点である。「辞書引き学習」では、分からない言葉を探すというネガティブな方向性ではなく、既に自分の知識として持っているものを見つけることから始まるため、取り組みに対するポジティブな感覚を得ることができる。第2の要因は、いわゆる「オーナーシップ」の感覚を高めることができる点である。ここでの「オーナーシップ」とは、紙の辞書というリアルな物体を所有するという意味と、自己の学習を自己管理するという意味を含意する。以上2つの要因が高等教育の外国語教育においても機能するか、あるいは機能させることができるかを、大学における日本語話者を対象とした初級中国語の語彙学習の中で実践することとした。

### (2) 導入

日本語話者が対象の初級中国語教育のなかで、学生が比較的容易に達成感を獲得できる領域としては、既に高い運用能力を獲得していることが想定される漢字知識を活用する方法があると考えられ、そこに着目した取り組みを行った。

取り組みに参加したのは、吉川の担当するK大学1年生（2018年度）の2クラスである。この取り組みにおいては、辞書ではなく、当該学部で独自編集された学習用単語集（紙媒体）である。なお、取り組みの開始時点で、学生たちは約65時間（週4.5時間/1学期14～15週間）の中国語学習歴があった。また、紹介された学習法を実際に利用するかどうかは学生の任意とした。

具体的な手順は下記の通りである。

①2つのクラスで事前試験を実施する。

②平均の低かった方のクラスに単語集の学習方法を紹介する。

#### 【学習方法】

・日本語の熟語と同じ意味の単語や前期の学習で

習得済みの言葉を見つけ、白色のシールを単語の横に貼り、通し番号をふる。

- ・覚えやすい単語を見つけて、黄色のシールを単語の横に貼り、通し番号をふる。
- ・未知の単語を記憶し、赤色のシールを単語の横に貼り、通し番号をふる。

③両方のクラスで最終試験を実施する。

### (3) 結果

#### ①事前試験結果 (2018年9月)

クラスA 平均: 42.08 (27名)

クラスB 平均: 36.41 (36名) 差: 5.67

クラスB (平均点が下のクラス) に上記学習法を導入した。

#### ②最終試験結果 (2018年12月)

クラスA 平均: 36.56

クラスB 平均: 32.00 差: 4.56

クラスAとBの平均差5.67 (前期試験)  $\Rightarrow$  4.56 (最終試験) 1.11点平均点が改善

試験のレベルは均等化されてはいるが、試験実施のタイミングの都合上、A・B両クラスで実施された試験の出題は、若干の相違がある。そのため、この1.11点という数値が統計的に有意であるかどうかは判断しかねる面がある。しかし、最終試験での平均点差は、事前試験時よりも拡大する傾向があり、また人数が多いクラスほど点数が伸びない傾向があるため、その改善を示す数値は経験的には有意であると言える。

### (4) 質的調査 (自由記述回答)

学習法を導入したクラスBにおいて、最終試験直後に質的問題を実施した。

#### ①肯定的なコメント

- ・自分が覚えたものに次々とシールが貼られていくので、学習する意欲が高まるものと思われる。シールが貼りにくかったが、分からないところは飛ばして先に進むため、早く進めることができている気がして、モチベーションを保つことができる。
- ・ピンインを覚えるのが難しかったが、意味は漢字を見れば何となく分かったので、案外覚えやすかった。

#### ②否定的なコメント

- ・覚えた単語に印をつけるよりも、覚えていないものに印をつける方が自分には合っているかもしれない。
- ・普段から覚えられた単語、もしくは覚えられていない単語にチェックをつけるくせがあるので、シールを貼る手間が面倒くさかった。
- ・正直シールに番号を書く作業とそれを貼る作業が面倒だった。左端に間違えたときにチェックをつけていくスタイルでも充分だった。

### (5) 分析と考察

#### ①「動機づけ」に関する分析と考察

既知の単語にシールを貼っていくという方法は、比較的好意的に受け止められたと言える。予想した通り、学生たちは漢字についての知識を持っているので、満足感を得るのに十分な数の言葉を見つけることができたからである。

単語集を活用した学習の導入としては比較的成功したと言えるが、この方法が何を意図したものかを明確に説明しなかったことや、取り組みを完全に任意としてしまったことから、継続につながらなかった事例も多く見られた。学習法の狙いや紹介のみならず数回はフォローを行うようにして、学生の主体的な学習が確立するまでサポートが必要であるように考えられる。

また、ある程度の学習対象言語の事前知識があればできるという意味では、ヨーロッパ言語間での言語学習においても、この学習法を活用する可能性があるのではないかと考えられる。

#### ②「学習方略」に係る分析と考察

とりわけ、既に自分なりの学習法を確立していて大学入学試験での成功体験を持つ学生には、今回紹介した学習法に興味を示しつつも、自分の学習法に対する固執や新しい学習法への反発も見られた。とりわけ元来モチベーションも高い学生ほど、自分が知らない言葉をチェックする方法の方が効率的であるとの感想を持つ傾向が強かった。既に学習姿勢や学習法を確立している学生の方略を阻害しないようにする必要を感じる反面、知らない言葉を後回しにして知っているものから始めるという方略が学習上のインセンティブになることや、それが他の学習全般にも適用可能であることも説明する必要があると

考えられた。

## 6. 研究のまとめ

分析に際しては、「児童、学生に対する『動機づけ』はどのように行われ、学習効果をあげているか」、そして、「児童、学生の『学習方略』は、どれだけ定着し、学習効果をあげているか」という2つの観点から分析を試みる。

### (1) 「動機づけ」に関する考察

「動機づけ」は、対象とする児童の所属する、教育文化、環境、そして、教育内容によってその効果が変わることが明らかになった。

「語彙」を習得させることに関しては、日本人が中国語を学ぶという「外国語学習」においては重要であるが、いわゆる母語教育、国家語教育としての日本における「国語（日本語）」では、日常生活で日本語を使う教育環境にあるため、重要視されてこなかった。イギリスの場合、英語を母語としない人々が国内に数多く存在する中で、英語教育の質の転換を図ることが求められ、語彙事項は、イギリスの英語カリキュラムにおいて重視されるようになった。こうした教育文化の変化、教育環境の変化により、教育内容が変遷したため、イギリスの小学校では、spellingが児童にとって克服すべき大きな課題となった。その課題に対応する語彙学習モデルとしてJishobikiは受け入れられたのではないか。

一方、日本の小学校児童は、辞書引き学習（Jishobiki）に対しては、語彙そのものの学習というより、語彙の文章を読み書きする能力や、コミュニケーション能力の向上に対する効果が高いと考える傾向がある。

また、辞書引き学習（Jishobiki）が、自分の関心のある言葉を調べて、発表するという、H小学校で行われていた授業のスタイルに、組み込まれているが故に、調べる言葉そのものが、児童のキャリアイメージに引き寄せられていたのではないかと推察される。学習者としての成長というよりも、将来、希望する職業から見た、語彙学習モデルの意義という観点でコメントをしていることは、イギリスの児童にはない発想である。

日本の児童は、イギリスの児童のように、学習者として自立していたり、俯瞰的に自らの語彙学習を眺めたりすることはなかったが、言葉の学習を言語学習の範囲で捉えようとするイギリス人児童と異なり、言語学習の範囲を意識せずに、言葉の世界を広げているところに特徴がある。

### (2) 「学習方略」に関する考察

同じ学習方略を指導しても、その方略が、各国の教育文化の文脈に取り込まれ、児童に「学習方略」を活用させていることは興味深い。“Jishobiki”は、言語の違いや、国や地域の文化の違いを超えて汎用的に活用できる自己調整学習モデルであることが証明されつつあるが、主体性概念そのものを示す、自明とされる文脈は大きく異なるという点において今後、精緻な研究が必要であるが、このモデルは、自己調整学習を促進する学習モデルであり、本モデルが持つ「学習方略」は、児童が課題と考える領域の学習成果に対して、大きな期待感を児童や教師に持たせることができたと考えられる。

自己調整学習としての語彙学習における語種間共通方略モデル「辞書引き学習（Jishobiki）」により、主体性や自己調整力が向上するという事実が確認でき、通常、地道な努力を必要とする語彙学習がActive Learning化したと評価できる。

## 謝辞

本研究は、Castlemorton CE Primary School校長Janet Adset氏、同校教諭Sian Cafferjey氏、そして、元邑南町立日貫小学校校長樋野不二子氏、同元教諭寺井臣子氏の研究協力のもと、貴重な研究実践のデータを得ることができた。ここに深く謝意を表したい。また、この2校で得た研究に関わる情報については、本研究の趣旨を逸脱しない範囲において公開することが許されていることもここに付しておく。

## 註

- 1) 小学館国語辞典編集部編『大辞泉（上巻）』第2版、小学館、2012年、1597頁。
- 2) Keisuke Fukaya “Fun Learning with Dictionaries:

A Hands-On Workshop by Dr Fukaya”, “Jishobiki: The Japanese Approach to Enhancing Children’s Knowledge and Use of Dictionaries” Asian Festival of Children’s Content 2017. 17–21th May 2017. Singapore

- 3) 深谷圭助「自ら学ぶ力を育てる国語辞典の指導法」は1998年愛知県教育委員会、愛知県教育文化振興会主催第32回愛知県教育論文個人研究最優秀賞を受賞し、同年、深谷圭助『小学1年生に国語辞典を使えるようにする30の方法』（明治図書、1998年）として、刊行された。
- 4) 「辞書引き学習法」に関する関連書籍には、以下のものがある。
  - ・ 深谷圭助『7歳から辞書を引いて頭をきたえる』すばる舎、2006年。
  - ・ 同『7歳から漢字辞典を読む子は学力が伸びる』すばる舎2008年。
  - ・ 同『なぜ辞書を引かせると子どもは伸びるのか』宝島社、2008年。
  - ・ 同『自ら学ぶ力をつける深谷式辞書図鑑活用術』小

学館、2010年

- ・ 同『辞書引き学習で子どもがみるみる変わる』小学館、2013年。

② Therefore, what you expect from the “dictionary subtraction learning method” is to demonstrate the subjectivity of the child.

On the other hand, it is about teaching English teachers.

① The teaching in the class is being developed based on the child’s ability view, then,

② The teaching of spelling guidance is considered as the most difficult problem. Especially in English lesson of Primary school. As a teaching method for overcoming the problem, it was revealed that UK teachers greatly hope for “Jishobiki”.

- 5) マルカムSノールズ、渡邊洋子監訳、京都大学SDL研究会翻訳『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイドーともに創る学習のすすめ』明石書店、2011年。

受付日 2019年 9 月30日

受理日 2019年10月29日

## Abstract

The purpose of this study was to introduce an inter-language common strategy model for vocabulary learning based on the theory of self-adjustment learning to school education in Japan and the United Kingdom. It is to prove whether the learner’s attitude toward learning vocabulary learning can be independently.

In addition, by introducing this model into the foreign language (Chinese) learning of Japanese universities, it is to prove that it is possible to take the initiative of the learning attitude.

Specifically, we will examine the effect siphone stake in the model by introducing “Jishobiki” , a common language-to-language model, to English education in the UK, Japanese language education, and Chinese language education in Japan.

In the United Kingdom and Japan, based on the interview verbatim record of children who have experienced this vocabulary learning model, we clarify, compare, and analyze the concept structure of the subjectivity. When a language learner introduces the inter-language common strategy model “Jishobiki” that promotes vocabulary improvement and the formation of continuous learning habits, English learning at elementary schools in England, Japanese elementary school learning, how to change vocabulary learning, which is considered to be a monotonous and patient learning, It is to examine empirically in the scene of Chinese study in Japanese universities.